

## フレーベル建議書

### 『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の周辺

——『母の書』書込みを手掛かりに——

甲斐規雄

#### 目次

はじめに

##### 1. 『母の書』の周辺

(1) 『母の書』の出版

(2) 『母の書』の評価

##### 2. フレーベルとイフェルテン学園

(1) 1805年フレーベルのイフェルテン訪問

(2) 1808年フレーベルのイフェルテン訪問

##### 3. 建議書『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の執筆

おわりに

#### はじめに

1996年9月23日未明、第二代明星学苑理事長・明星大学学長児玉三夫先生は J.H.ペスタロッチと同年の81歳と1か月の生涯を全うされた。大正デモクラシーの濃厚な新教育思想を实践する成城小学校・中学校・高等学校の一貫教育を受けた後、東京大学の春山作樹のもとで『ペスタロッチの教育思想』の卒業論文を作成している。先生の教育思想と教育実践は明らかにペスタロッチの思想を根底にしており、『隠者の夕暮』をバイブルとしていた。この一貫してペスタロッチを体し、教育実践に捧げた功績は「ペスタロッチー教育賞」受賞という形で評価された。

明星大学図書館は、貴重な西洋教育史・思想関係文献の宝庫である。心理・教育学科教育学専修の現在から将来にわたるスタッフ、大学院・学部学生の教育、研究のために、先生が明星大学創設からご苦労されて整備されたものである。ペスタロッチの意図が充分理解されず当時の教育関係者の不評を買った『母の書』、表紙の裏の上半分にいかにも F.フレーベルらしい几帳面な直筆の初版本への書込みを見た時の動悸を忘れられない。実際にこの『母の書』を手にしペンで書き込むフレーベル、その本を今まさに手にしている。そしてフレーベルが250部自費出版した『人間教育』の初版本もここにある。頭の中にこれらを基礎資料にあらゆる構想が脳裏を駆け巡る。この『人間教育』の構図は、もしかすると『母の書』を出発点として、シュヴァルツブルク＝ルードルシュタット侯国へのフレーベル建議書『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』<sup>(1)</sup>で出来上がっていたのではないかという仮説である。

児玉三夫先生は、大変な遺産を置いて逝かれた。

#### 1. 『母の書』の周辺

### (1)『母の書』の出版

『基礎の書 母の書またはその子が気づいたり、話したりすることを母が教えるための手引書』(Pestalozzi's Elementar = Bücher. Buch der Mütter oder Anleitung für Mütter ihre Kinder bemerken und reden zu lehren.)<sup>(2)</sup>は、ペスタロッチの指導の下に1803年コッタ社から出版されている。しかし、ペスタロッチ生存中に出版されたコッタ版全集にはペスタロッチの単独執筆ではないため収められていないが、E.シュプランガー等の批判版には全文収められている。<sup>(3)</sup>

明星大学図書館に収蔵されている『母の書』はこの初版である。その表紙の裏のフレーベルの書込みに「ペスタロッチ教授法の評価、それをニーデラー<sup>(4)</sup>が、それほど十分でない教育学の視点、そしてプラトンの見方についての誤った考え方で教育を表現した。二つの論文は、シュヴァルツブルクの子どもの学校教育運動となるべきだ。1808年8月 Gotha bey Pantos」とある。この『母の書』のフレーベルの書込みには、思想的にこの書の判断がニーデラーと深い関わりがあること、そしてペスタロッチの教育思想を正確に理解しさえすれば祖国シュヴァルツブルク＝ルードルシュタット侯国の学校教育改革の推進に貢献するというフレーベルの思いが込められている。

『母の書』は、天地193mm、左右118mm、束17mmの仮綴じの小冊子で、ペスタロッチ自らが書いた10ページにわたる序文、97ページからなる第7番目の練習と、算術 Rechnen の主任教師であったクリュージー<sup>(5)</sup>が書いた第1から第6番目の60ページに及ぶ練習とからなっている。<sup>(6)</sup>

このようにその編輯が略三分の一弟子たちに委かされることになったのは、ドゥ・ガンによれば「この基礎的な書物『母の書』の著者は、教授の要素を単純化し、段階を増し、もって綿密に分割された階梯を作る<略>母親たちが我が子に言わねばならないこと、若しくは言わせねばならないこと総てを一語一語授けようと欲した。<略>ペスタロッチのごとく新しい思想が次から次にと起こってくる精神の持ち主」<sup>(7)</sup>には、細部に亘って説明することはできなかったからだと述べている。

H.モルフによれば、「外部から妨げられることなく児童の本性の発展法則の探求を続け、且つはこの法則に十分な教授手段を組織するといふ企てを継続し得る状態に彼(ペスタロッチ)を置いた。<略>彼及び彼れの門弟がブルグドルフで実行している児童教育の新編制を命名したような方法——は先ず第一に今まで見捨てられていた民衆特に貧民に役立つはずのものであった。」<sup>(8)</sup>このことは人間性の発展法則に従って、下の段階から上の段階へと昇る教授手段を一般的、普遍的に「六歳以下の児童に与へらるべき全ての予備知識における児童教育の最も単純な原理の実践的指導の編輯に着手した<略>従ってその書物は最も幼少の時から、子供に言ふこと話すことを教へるための母の案内書となる筈のものであった。」<sup>(9)</sup>ペスタロッチ自身は「私の方法は本質的に感管の練習・言語力の養成・計算と測量との発展のための直観手段の集積に外ならない。それは謂はば三段階に依ってその目的に達する。<略>第一段階のためには母の書」<sup>(10)</sup>であるとしている。六歳以下の子供にとって外界の印象が精神の発展に大きな意義を持ち、その際精緻な指導が必要であることが窺える。「一般的直観教授は『母の書』のうちに含まれている。<略>この書物は無知な母をすら有能ならしめる」<sup>(11)</sup>し、「母は如何なる場合にも子供の肉体の陶冶と知識の発達そして心の感情の鼓舞とに向かって働きかける。さて子供の陶冶を母の上に建てずして、何か他のものの上に<略>建てようと欲する我等が同時代の人々よ<略>子供の陶冶を神が陶冶の

力をその心情に与えた女性的手中に置かねばならない。」<sup>(12)</sup>

この前提は既に『ゲルトルートはいかにしてその子を教うるか』の第一信に述べられている。「彼は教授と学習との機構を単純にしようとしています。Er will den Mechanismus des Lebens und Lernens vereinfachen. 彼が自分の教科書に取り入れ、児童に与えようと望んでいる事からは、どんな母親でも、また後にはどんな教師でも、ごくわずかの教授能力さえもっておれば、それを理解し、言ってみせ、説明し、まとめてやれるようなきわめて単純なものでなければなりません。特に彼が望んでいる事からは言語教育や読書教育 Sprech- und Leseunterricht を簡易化してやって、子供の初期の陶冶を母親にとって愉快で熱意のあるものにしてやり、彼の言い方を借りれば、小学校の必要を漸次なくし、これを改良された家庭教育で補充することです。そこで彼は自分の教科書が刷り上がったなら、直ちに母親たちとともに実験しようとしています。」<sup>(13)</sup>

ここで言う「自分の教科書が刷り上がったなら、直ちに母親たちとともに実験しよう」としていたのが『母の書』である。コック版には「私がまだ胸の中に秘めているうちに」とあるが、批判版には「まだ1803年にもならないうちに」<sup>(14)</sup>と具体的なその発行年を記載している。これが『母の書』である。

## (2)『母の書』の評価

ペスタロッチ自身の書いた序文で、「母親に与える書は、子供の性向が自ずから赴く方向に副って発展するという道筋を示し、扶ける方法を示す。そしてそのことを遵守するという立場を確固たるものにし、子供の力を子供自身が気づいたり、話したりすることを最も単純、容易に、そして知的、道徳的に育成」<sup>(15)</sup>することの必要性があると訴える。そのためには、子供が見たり、聞いたりという外的なことだけでなく、子供自身が母性的な配慮と愛情でだれの扶けも借りず自分の頭、顔(額)、目、鼻、口、歯、舌、耳で自ら感じ、言うことが大切である。このことをニーデラーはペスタロッチ宛の書簡で「『母の書』に依って概念に対する予備品と材料とが与えられ、基礎教授によって秩序と組織との力が養はれ、児童はもはや世界において不案内な者ではあり得ません。児童は世界を占取し世界に住み慣れます。単に外観からばかりでなく実際上にも。児童は常に自ら方向を定め、常に自ら自助自活することができるのは必定であります。」<sup>(16)</sup>と書き送っている。

ペスタロッチは、「人々は皆叫んでいる、母親たちは掃除・洗濯・編物・縫物そして生活にやっとなのに、更に新しい仕事を引き受けさせられる。私は答える。それは仕事ではない。それは遊びだ。それは彼女たちから時間を奪いはしない、反対にむしろ彼女たちを苦しめる瞬間を無数の空白で満たしてくれる。人々はこれに対してほとんどその意味を理解せず、いつも私に応酬する。母親たちは望みはしないだろう!と」<sup>(17)</sup>。「母親たちが、母性本能の最初の靈感がその愛情に告げる自然の道を辿りつづけること以外の何ものであってもならない道に従って我が子を教育することによって、教育の改革を自分自身でなすよう、母親たちに呼びかける」<sup>(18)</sup>ことは間違いではない。ペスタロッチの思想形成の流れからすると当然である。

にもかかわらず、『母の書』はペスタロッチが始めに抱いた意図からは遙かに遠く、遙かにそれを越えていた。これは彼が期待していた利益をもたらさなかった。当の母親たちによって受け入れられなかった。＜略＞ペスタロッチの思想を捉らえていた誤りのためであって＜略＞決して教説の誤りではなく、ただ当時の母親たちがペスタロッチの方法を我が

子の教育に適用するとき出会わねばならなかった困難を誤って評価したということだけである。＜略＞児童の理解し得る感覚界の研究は無限に異なる無数の対象を含んでいた。そこでそこには秩序と、どこでも同一たり得る出発点、即ちかかる訓練を始めようと欲する総ての母親が必ず眼前に所有する観察の最初の対象がなくてはならなかった。ペスタロッチはまず児童の身体そのものを〔その最初の対象として〕選んだ。」<sup>(19)</sup>

このことをK.ジルバーは「クリューズィによって手を加えられた現存の草稿では、ペスタロッチ自身がその言語の練習問題でおかしていた誤謬をただ強めているにすぎない。すなわちそれは、最初の会話の教授の際、子どもが自分自身の肢体を名ざしはじめるという仕方、『子どもから出発する』のである。」<sup>(20)</sup>と、「子どもから出発」したことを問題とする。それは「『ペスタロッチは、子供たちにお前たちの＜鼻は顔の真中にある＞ことを教えるために実に苦勞しているのである』しかし、この句は実際にクリュージーによって書かれたテキストの中に、身体の各部の関係や位置についての章に入っていたからである。」<sup>(21)</sup>

「ペスタロッチはブルグドルフにいた頃からクリュージーとブースとに、後になってシュミットに、彼のいわゆる『基礎的な書物』の編纂を委かせていた。『母の書』と『数と形の練習』がそれであった。この労作において作者たちは自分の先生の指示に文字通りにしか従わなかった。そこで原理は優れているにも拘らず、学校でこれを応用することは不可能であり、下手にしか応用されなかったが、その原因になった単調さと極端な冗慢さの罪を彼等に帰することは殆どできない。」<sup>(22)</sup>

しかし、ユトランド半島の首府から遠く離れた地にデンマークの師範学校から最良の教師を採用し、「私は（シャルルロッテ・シメルマン）夫の建てた五つ六つの学校がやはり新方法を大いに利用するやうになることを望みもすればまたその時には——私の望み通りに——母の書が益々深く理解されて、それが心のうちに取り入れられるやうになることを希望します」<sup>(23)</sup>という書簡がペスタロッチに届いている。

## 2. フレーベルとイフェルテン学園

### (1)1805年フレーベルのイフェルテン訪問

1805年フレーベル（23歳）は、フランクフルトの模範学校 Musterschule の初代校長になったばかりのA.グルーナ（27歳）<sup>(24)</sup>からの提言でその学校の教師になる。「当時教育と教授の合言葉はペスタロッチであった。私にとってもその合言葉はすぐに自分のものとなった。何故ならグルーナ、教頭はかつてはペスタロッチの生徒であったし、その上グルーナはペスタロッチの教授法に関する本まで書いていたからである。」<sup>(25)</sup>そのグルーナ、同僚の推薦でフレーベルは同年秋イフェルテンに到着、2週間滞在する。その間算術の主任教師クリュージー、シュミット<sup>(26)</sup>、図画、地理の主任教師トプラー（Johann Georg Tobler, 1769-1843）、植物学のホップ<sup>(27)</sup>、ドイツ語、唱歌、読み方の授業を学んでいる。この部分でフレーベルは「ペスタロッチ自身がこの最高の精神的メカニズムに感動して心を奪われていた＜略＞彼はいつも言うのであった。『行ってよく見給まえ』Geht und schaut（見、聞き、注視する心得のある者にとってはよいことである）とか、『すごいぞ』es geht ungehör（ungeheuer）。と」<sup>(28)</sup>と注記している。この時には、既に『母の書』が出版されているはずであるが、この「マイニンゲン侯に宛てた書簡」にはその書名は出ていない。

帰国後模範学校で算術、図画、地理、植物、正字法そしてドイツ語を教授する傍ら、フ

ランクフルトで最も有力な貴族であるホルツハウゼン (Georg von Holzhausen) 家の家庭教師を毎日 2 時間行なうことになっていた。夫人のカロリーネ (Caroline von Holzhausen 1775-) の懇願で、カール (Carl von 1794-)、フリッツ (Fritz von 1797-)、アドルフ (Adolph von 1799-) 三人の少年を指導することになった。「授業は算術とドイツ語であった。前者はすぐに軌道にのった。私はそれをペスタロッチのやり方でやった。〈略〉私は語学の授業をペスタロッチの『母の書』を結びつけ始めた。この方法でやるとはるかにうまくいった。」<sup>(29)</sup>すると第一回目のイフェルテン訪問の際、この『母の書』を既に入手していたことになる。

資料としている「マイニンゲン侯に宛てた書簡」が 1826 年に書かれたものであるため 1809 年に書かれた『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の証明にはならないが、この時期「基礎教育とは何か」、「ペスタロッチの設立した教授法はどんな意味を持つのか」、「一般に教授の対象は何か」がフレーベルの心を奪っている。「人間は対象物の世界に住んでいるが、その対象物は人間に影響を与え、人間はまた対象物に影響を与えようとしている。それ故人間は対象物をその本性に従って、対象物相互の関係や人間に対する関係に従って認識しなければならない。対象物は形 (形の学習 Formenlehre) と量 (量の学習 Größenlehre) とを有し、多様 (数の学習 Zahlenlehre) である。〈略〉そのときの成長段階に応じて、全てを人間を通して、人間の自己と外界に対するその関係を通して明らかにしようと努めた。当時私の心に浮んだ最高原理は、一切は統一である、ということであった。即ち、一切は統一の中にあり、統一から出発し、統一に向かって努力し、そこに至り、そして統一に戻る。統一の中でのこの努力と統一への努力とは、人間生活の中の様々な現象の基礎である。」<sup>(30)</sup>これは、『人間教育』の原理であり、『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の「ペスタロッチによれば全体はこのようにして、これらの全学問と技術とが人間から出て、ふたたび人間という一点に出会う alle diese Wissenschaften und Künste eben so wieder in einem Punkte まで貫徹されなければならない。かかる出会いの成果は哲学である。」<sup>(31)</sup>という根本の考え方である。

## (2) 1808 年フレーベルのイフェルテン訪問

フレーベルは 1808 年 7 月頃ペスタロッチに「あなたに、尊敬するペスタロッチ先生に、そして最も大切にする父に、私の存在の全体をあなたのために満たしている限りなく深い尊敬を、個人的に示し得る機会が自分に与えられることを、私は夢見ていました。」<sup>(32)</sup>と書き送っており、その 9 月 27 日、フレーベルは「教師であると同時に生徒、教育者であると同時に弟子ということになった〈略〉ペスタロッチは、この生活と活動の心臓部であり、発芽体であり、精神的支柱 der Herz =, der Lebenspunkt, der geistige Träger dieses Lebens und Wirken」<sup>(33)</sup>であると確信し、ホルツハウゼン家の 3 人の少年を連れて再度イフェルテンに向けて出発した。「到着当時、私の周囲に波うっていた生活が私の心にどのように反映したかは、1809 年の報告が示している。」<sup>(34)</sup>この「私の周囲に波うっていた生活」とは、「学校そのものにおいては「内部的には生きていたが、外部にはこれまで隠蔽されていた不和」——この不和の存在こそ新年にペスタロッチを駆つて極めて痛烈な悲嘆の叫びを挙げさせたのである。——が既に五月に明るみに出た。即ちペスタロッチは女学校に対するニーデラーの態度に就いても、また全学園の名望を侵害するであろうところの彼の特性と欠点についてもニーデラーを非難するに至った。この非難は口づから行なわれしかも強烈なものであったらしい。」<sup>(35)</sup>ニーデラーは学園を出て下宿、授業のみ担当するが、フ

レーベルが到着したその頃また軋轢が起った。ペスタロッチは「自ら議長となって毎週男女教師の会議を開きそして『単に一定の人（恐らくシュミットのことを言っているのであろう）の言葉だけでなく、あらゆる人々の言葉にも耳を傾け』て貰いたいと乞うている。」<sup>(36)</sup> フレーベルは妥協を許さない26歳の青年であった。

1808年1月12日ペスタロッチ63回目の誕生日、シュミットは『数学に関する草稿』（「ペスタロッチーの原理に依る形と量との要素」）という贈物をする。ペスタロッチは自費で印刷、「1809年5月書店に渡されたこの書物は急速に販路を開き非常な喝采を博した。＜略＞ディステルウェークは自己の見聞から、この書に『熱心な、殆ど拝むような信奉者達』を見出した＜略＞この書は今日尚ほ自習をするためにも、また全ての新しい基礎的著書の作者が精神または形式を——たとひ恐らくただ間接に過ぎないにしても——それから創造したところのその源泉を知るためにも真面目な推薦に値する。」<sup>(37)</sup>と激賞している。

### 3. 建議書『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の執筆

前述した明星大学所蔵『母の書』のフレーベルの書込みのもう一つは、「一つの思想界の著書、これは他の教師たちにも推奨されるべきだ。この書はただいわゆるメトーデの詳述としてだけではなく、それ自体が統一性のある著書として整理されている。ペスタロッチの基礎教育の方法（メトーデ）そしてその方法の基礎学校への採用について、並びにミューラーに一言。そのため万聖節の義務が気にかかっています。Von J.Sg. Voß. Mit Musik zur Gesanglehre Singen b.Müller u.a.1810.8」<sup>(38)</sup> フレーベルは、1810年8月22日フランクフルト・アン・マインの郊外にあるオーデの別荘に戻っている。この Von J.Sg.Voß とは、1803年8月南プロイセン政府が視学官イエツオロウスキーをブルグドルフに派遣し、ペスタロッチと彼の教授法の原理を調査し、故国の教育の再編制に供することを願った文部省の長官である。「この国の指導者も先覚者も児童のよりよい教育のために骨折ることに依って、より立派なより幸福な将来を創造することを自己の第一課題の一つと考へた。息むを得ない必要事のためには個人とは言はず国家とは言はずあらゆる救済策を講じなければならなかったような多難な時期のさなかにあつて、しかも、身を背負ふプロシヤの政治家たちが将来の学校にその救済手段を求めつつ希望の目を輝かせ、事情の許さぬほどの犠牲をもあえて厭わなかったとは、涙ぐましい、偉大な、感激的な、しかもいまだかつてないことである。」<sup>(39)</sup>

この事実をフレーベル自身は、1805年のイフェルテン訪問の際承知していたことになる。そのフォースは、ペスタロッチ宛の書簡で賛辞している。「身柄の關係と土地の關係とそしてまた他の事情とが許す限り私は貴下の方法の主要点である教授の直観性・話すことの実際の練習・目測及び計算の練習が南プロシヤの学校に現に存在し、そして次第次第に建設されていく有様を特に押し進めていくであろうということを。しかし未来の南プロシヤの師範学校では特に有為な人にそれを習熟させることを意図しています。これによって私は貴下に恩義と非常に特別な尊敬との最も力強いまた最も好ましい証明を捧げ、持って常に貴下のまったく従順な奉仕者たるの光榮を有すると信じます。フォン・フォース ドーム・ハーフェルベルク 1804年3月27日」<sup>(40)</sup> このフォースが、ペスタロッチの思想を形式化された教授法としてとらえたのではなく、その精神を理解したからであろう。そのことにフレーベルは感動し、故国シュヴァルツブルク＝ルードルシュタット侯国へのペスタロッチ

教授法導入を建議した一つのきっかけではなかったかと考えられる。

フレーベルは、イフェルテン到着3か月後「人が、一般に、ペスタロッチの教授法について、いわんやペスタロッチの教育方法について知っていることは、何ものでもなく、今、イヴェルドンで行なわれているものの影なのです」。「ペスタロッチは、私にとって助言者であり、友人であり、我々皆の愛する父なのです。＜略＞そして、あらゆる対立にかかわらず、＜略＞彼は、私に、彼の信頼に満ちた愛と尊敬の印を与えてくれます。」<sup>(41)</sup>と述べている。

27歳の希望に燃え、意欲漲る青年にしてみれば、母国を思う正義感を押さえることはできなかったであろう。それが『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』(Friedrich Fröbel über Heinrich Pestalozzi. Yverdun den 1.-27. April 1809.)である。

## おわりに

『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の中の『母の書』については、指定枚数の関係で次の機会にまとめるが、フレーベルは、その建議書の中で無批判ではないが積極的に『母の書』の分析を試みている。またフレーベルは、『人間教育』の「幼児初期の人間」の部分で「母たる人は、別に理論をまたなくても、指導したまま教えることができなくても、自ら本能的にこれを実行している。それだけでは足りない。一步進んで、意識をもって mit Bewußtsein ゆけるところまでゆかねばならない。即ち自ら一人の意識した存在 ein bewußtwerdendes Wesen として、一方これから成長していく児童に意識をもって対しつつ、人間の絶え間のない発達を目指しつつ、そして自ら意識をもって子供の心と深く結合しつつこれを実行するのでなければならない。」<sup>(42)</sup>と述べる。この「意識をもって」は、『母の書』に根本的に依っているし、更にハイラントが言うように「『母の歌と愛撫の歌』(1844年)の前段階を示している」<sup>(43)</sup>。そして、彼の名前を不朽のものにした幼児教育の実践へと志向してゆく大きな原動力ともなっている。

フレーベルは、『母の書』を出発点として、シュヴァルツブルク＝ルードルシュタット侯国への建議書『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』を執筆、この26歳という時点で彼の教育思想を発展させることができなかったとしても、教育についての問題意識は確かなものとなったのではないか。そしてその後のゲッチンゲン大学、ベルリン大学での学問研究、カイルハウでの教育実践は、この問題を常に意識し、自分なりの確固たる人間教育の教育学的構造を構築しようとする足跡ではなかったのだろうか。

1826年の主著『人間教育』の構図、幼児教育思想の全貌は、『母の書』を出発点として『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の建議書で出来上がっていたのではないかと言うのはこの意味である。

## 注

- (1) 一般に『シュヴァルツブルク＝ルードルシュタット侯国への建白書』と言う場合、1809.4.1-27/1809.5.1/1810.5.16/1810.6.13の4回の書簡を指すが、本論文の場合『母の書』、『人間教育』との関係を検討するのが趣旨であることから、1809.4.1-27の第1回目の“Friedrich Fröbel Ueber Heinrich Pestalozzi”に限った。
- (2) J.H.Pestalozzi, Pestalozzi's Elementar = Bücher. Buch der Mütter, ihre Kinder be-

- merken und reden zu lehren. Erster Heft. Zürich und Bern, in Kommission bey Heinrich Gessner, Buchhandler, und in Tübingen, id der J.G.Cotta'schen Buchhandlung, 1803.
- (3) J.H. Pestalozzi, Buch der Mütter oder Anleitung für Mütter ihre Kinder bemerken und reden zu lehren, Schriften aus den Jahren 1803-1804. bearbeitet von Emanuel Dejung und Walter Klauser, 15. Bd., Pestalozzi Sämtliche Werke, Kritische Ausgabe, begründet von Arthur Buchenau, Eduard Spranger, Hans Stettbacher, Orell Fussli Verlag Zürich 1958. S. 175-340.
  - (4) Johannes Niederer (1779-1843), 1800年イフェルテン訪問, 1803年ペスタロッチの協力者, 教頭を勤めた。『週報』編集発行責任者。彼のペスタロッチへの思想的介入, Joseph Schmid (1786-1850) との対立等学内紛争は絶えず, 1817年学園を去り, 後の『ヒーパーの書』は病の床にある師ペスタロッチを死にいたらしめたと言われる。
  - (5) Hermann Krusi (1775-1844), ペスタロッチ最初の協力者1800-1816在籍。
  - (6) 21ページの Das Angesicht liegt vorne am Kopfe の行の右空白に薄い鉛筆書きの書込みがあるが, 文字は不鮮明で内容も定かでなく, またフレーベルの直筆であるかどうか不明である。
  - (7) ドゥ・ガン『ペスタロッチ伝』(新堀通也訳) 学芸図書 1955年 301ページ
  - (8) H. モルフ『ペスタロッチー伝』第二巻(長田新訳) 岩波書店 1940年 9ページ
  - (9) 同前書10-11ページ
  - (10) 同前書25ページ
  - (11) 同前書221ページ
  - (12) 同前書257ページ
  - (13) J.H. Pestalozzi, Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, Ein Versuch, den Müttern Anleitung zu geben, ihre Kinder selbst zu unterrichten; in Briefen von Heinrich Pestalozzi, Pestalozzi's sämtliche Schriften. 5. Bd. Stuttgart und Tübingen, in der J.G. Cotta'schen Buchhandlung 1820. S. 44f.
  - (14) J.H. Pestalozzi, Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, Schriften aus der Zeit von 1799-1801. bearbeitet von Herbart Schönebaim Kurt Schrenk, 13. Bd., Pestalozzi Sämtliche Werke, Kritische Ausgabe, begründet von Arthur Buchenau Eduard Spranger Hans Stettbacher, Orell Fussli Verlag, Zürich 1932. S. 209.
  - (15) J.H. Pestalozzi, Buch der Mütter oder Anleitung für Mütter ihre Kinder bemerken und reden zu lehren, Kritische Ausgabe, ebd. S. 347.
  - (16) H. モルフ『ペスタロッチー伝』前掲 158ページ
  - (17) J.H. Pestalozzi, Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, Kritische Ausgabe, ebd., S. 208f.
  - (18) ドゥ・ガン『ペスタロッチ伝』前掲 300ページ
  - (19) 同前書 300-301ページ
  - (20) K. ジルバー『ペスタロッチー』(前原寿訳) 岩波書店 1981 176ページ
  - (21) ドゥ・ガン『ペスタロッチ伝』前掲 304ページ
  - (22) 同前書 516ページ
  - (23) H. モルフ『ペスタロッチー伝』前掲 158ページ
  - (24) Gottlieb Anton Gruner (1778-1844), コーブルク出身, 師範学校からゲッチンゲン, イエナ大学で進学, 哲学, 教育学を学ぶ。1801年イフェルテン学園を訪問。
  - (25) F. Fröbel, Aus einen Briefe an den Herzog von Meiningen, Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, 1. Bd. Aus Fröbel's Leben und ersten Streben Autobiographie und kleine Schriften. Herausgegeben von Dr. Wichard Lange. Berlin, 1863. Verlag von Th. Ch. Fr. Enslin. S. 74. ここで言うペスタロッチの教授法に関する本とは『ペスタロッチ, 彼の



方法そして学園についてのブルクドルフ通信, フランクフルト』 Briefe aus Burgdorf über Pestalozzi, seine Methode und Anstalt, Frankfurt, 1804. を指す。H. モルフ『ペスタロッチー伝』前掲 382-399ページ。

- (26) ebd.S.77f. Josias Schmid(1786-1850).『ゲルトルートは如何にして子らを教えるか』(1801)のメトーデの具体化を主張, Johannes Niederer は理想的, 哲学的体系化を主張し対抗している。
- (27) Johan Samel Hopf, 1784-不明, 博物教授の基礎研究は『母の書』を継続している。H. モルフ『ペスタロッチー伝』第四巻(長田新訳) 1940年 14ページ。
- (28) F.Fröbel, Aus einen Briefe an den Herzog von Meiningen, ebd.S.78
- (29) ebd.S.80ff.
- (30) ebd.S.89ff.
- (31) ebd.S.213.
- (32) H. ハイラント『フレーベル入門』(小笠原道雄, 藤川信夫訳) 玉川大学出版部 1991年 51ページ
- (33) F.Fröbel, Aus einen Briefe an den Herzog von Meiningen, ebd.S.96.
- (34) ebd.S.97.
- (35) 前掲 H. モルフ『ペスタロッチー伝』第四巻 243ページ
- (36) 同前書 248ページ
- (37) 同前書 278ページ
- (38) Müller については不明。
- (39) H. モルフ『ペスタロッチー伝』第四巻 前掲 279-280ページ
- (40) H. モルフ『ペスタロッチー伝』第二巻 前掲 379-380ページ
- (41) 前掲 H. ハイラント『フレーベル入門』 51ページ
- (42) F.Fröbel, Menschenerziehung, ebd.S.38.
- (43) H. ハイラント『フレーベル入門』前掲 128ページ